

# 解釈学的論理学 (hermeneutische Logik) とレトリック

## —精神科学の基礎づけに対するレトリックの可能性について—

瀬戸口 昌也

### はじめに

デイルタイは、「生の哲学 (Lebensphilosophie)」の立場から、その生涯をかけて哲学と精神科学の基礎づけについて研究した。彼がその基礎づけの方法を、心理学と解釈学に求めたことは、後の精神科学の方法論に大きな影響を与えることになった。デイルタイ自身は、基礎づけの方法として、心理学と解釈学がどのような関係にあるのかについては最後まで慎重であり、最終的な答えを留保している。デイルタイの残したこの問題は、その後十分に考察されることはないまま、解釈学の歴史に対して、ガーダマーが指摘するような心理主義的な「伝統的解釈学」と、その後の存在論的な「哲学的解釈学」の展開という見方を産み出すことになってしまった<sup>(1)</sup>。そしてこの区分は、ローディが暴いて見せたように、哲学と精神科学の基礎づけの方法として、伝統的解釈学に見られる「認識論的方法論的反省 (erkenntnistheoretisch-methodologische Reflexion)」を取るか、それとも哲学的解釈学に見られる「基礎存在論的反省 (fundamental-ontologische Reflexion)」を取るかという、二つの異なる立場の対立を際立たせることになったのである<sup>(2)</sup>。

このように、哲学と精神科学の基礎づけにおいて問題となった心理学と解釈学との関係、さらには解釈学における「認識論的方法論的反省」と「基礎存在論的反省」との対立は、解決すべき問題として未だ議論の最中にある。これらの問題を解決するための最も有効な手がかりを、われわれはデイルタイの娘婿であり、直弟子でもあったゲオルグ・ミッシュの「解釈学的論理学」の構想に求めることができるだろう。その理由として、以下の点が指摘できる。

1. デイルタイは後期には、心理学の考察の対象となる「心的なもの (Psychisches)」は「体験 (Erlebnis)」の意味理解から抽象化されてくるものであることを自覚していた反面、意味理解は「心的構造 (psychische Struktur)」に基づくものという中期以来の見解を維持していた。デイルタイの構造心理学が持つこのような矛盾に対して、ミッシュは構造心理学の内容的な検討よりも、「心的なもの」と「物的なもの (Physisches)」との区分が生じてくる過程を生の哲学の立場から、発生的に考察しようとする。そこで彼は、生の「意味連関 (Bedeutungszusammenhang)」の把握から、心的連関が抽象化されてくるとともに、物的な対象が論証的に把握されてくる過程を分析するのであり、これをミッシュは「生の哲学の意図に対応する論理学」として特徴づけ、「解釈学的論理学」と名づけている<sup>(3)</sup>。このような論理学は、デイルタイの構造心理学が本来持っている問題点に立ち帰って、解釈学と心理学の関係を捉え直そうとする試みである。

2. ミッシュにとって「意味 (Bedeutung)」は、「生の連関 (Lebenszusammenhang)」を把握するための最も重要な「生の範疇 (Lebenskategorie)」であるが、それは「言説 (Rede)」において対象を論証的に把握するものとして機能する一方で、ハイデガーの言うように、人間の「実存的なもの (Existentialies)」にもかかわっている。解釈学が意味を問題とする限り、意味の持つこのような二重の特徴を考慮しなければならない。ミッシュはこの二重の特徴を、「解釈学的に仲介

される」ものとして捉えている<sup>(4)</sup>。このことは、解釈学における認識論的方法論的反省と基礎存在論的反省を、従来のように対立的なものとして捉えるのではなく、両者を結びつけて捉えなければならないことを示唆するものである。

以上のような理由から、ミッシェの解釈学的論理学は、哲学と精神科学の基礎づけの問題に対して、有効な解決の手がかりを与えてくれるものと思われる。ミッシェの解釈学的論理学は主として1920年代と30年代に、彼がゲッティンゲン大学で教職に就いていた時期に展開されたものであるが、その講義録がローディの手によって出版された1994年以降、ディルタイ研究者を中心として、ミッシェの行った研究についての再評価が高まってきている<sup>(5)</sup>。またそれに関連して、その研究内容から、ミッシェと同様に解釈学的論理学として特徴づけられる他の二人—ハンス・リップスとヨーゼフ・ケーニッヒ—の研究についても、現在多様な観点から研究が進められている<sup>(6)</sup>。本論文は、ミッシェの解釈学的論理学の中でも、特に問題点のひとつとして指摘されているレトリックとの関係について考察してみたい。解釈学的論理学は、ミッシェの意向に反してレトリックと見なされることがあるが、その理由を明らかにすることにより、解釈学的論理学とレトリックとの関係を明確にする。そしてそこから、精神科学の基礎づけに対して、レトリックはどのような役割を果たすことができるのかについて明らかにしてみたい。

## 1. ミッシェの解釈学的論理学に対するガーダマーの見解

ミッシェの解釈学的論理学が、レトリックと同様に見られる理由は、彼の「論証的なもの (Diskursivität)」についての独自の考え方にある。ミッシェにとって論証的なものとは、従来の論理学が考察の対象としてきた推論や概念、判断などの思考形式だけを指すものではない。このような思考形式は、対象についての「純粋に論証的な確定」であり、自然科学の命題にその典型が見られるものである。それに対して、「思考それ自体が意味していることが、言われたことの中で言い尽くされないで、それを越えて理論的には把握できないような実在へと向かう」<sup>(7)</sup>のような思考形式がある。その典型として、詩の表現形式が挙げられる。たとえば隠喩は、それが意味している内容を明確に確定することなく、読み手に解釈を要求する。ミッシェはこのような思考形式を「喚起的表現 (evozierender Ausdruck)」と呼び、「純粋に論証的な確定」の対極に置くのである。このようにミッシェは、論証的なものに対して純粋に論証的な確定と喚起的表現の両極を置き、その間に段階的な移行を取る中間領域を置く。そして精神科学が扱う対象領域は、この中間領域に属するものであるとしている。

ところでガーダマーは、解釈学的論理学に関してベアトラムとローディとの間で1996年に行った対話の中で、ミッシェの「論証的なもの」の概念について、ハイデガーにもそれに近い見解があったことを認めている<sup>(8)</sup>。その上で、それはむしろ従来レトリックと呼ばれてきたと述べている。しかしハイデガーの場合、レトリックはアリストテレス研究の中で考察されているだけで、論証的なものと結びつけて考えられることはなかったと、ガーダマーは言う。それに対してガーダマーは、レトリックをアリストテレスの「フロネーシス (phronēsis)」とともに実践哲学の下に置き、それは「数学的な正確さ (= 変わりえないもの) を持たないもの」を広く取り扱うものとしている。ガーダマーのこのような見解は、これまで「文彩の技術」として理解されてきたレトリックの概念を拡大するものであり、ミッシェの言う「論証的なもの」の範囲に相当するものと言ってよいだろう。ガーダマーは、レトリックのこのような機能に注目し、それを研究する一方で、しかしそれを従来のように「レトリック」と呼んでよいものか疑問を呈している。なぜならガーダマーによれば、伝統的な意味でのレトリックは、詭弁をも含む「説得の術 (Überredungs-

kunst)」という先入見があり、ここでガーダマーが想定しているような、「数学的な正確さを持たないもの」について確信を抱かせるような「納得の術 (Überzeugungskunst)」を表すのにふさわしい表現とは思えないからである。後者の場合、「レトリック」と呼ぶことを、ガーダマーは慎重に避けている<sup>(9)</sup>。このように、「レトリック」という表現に抵抗を示す点では、ガーダマーはミッシュと共通している。

ガーダマーのこのような見解に対して、ミッシュの解釈学的論理学をレトリックと同一視する見方もある。例えばグロンディンは、解釈学的論理学は「論理学」というよりも、むしろ「意思疎通のモデル (Verständigungsmodell)」としてレトリックの次元で考えられるべきものではないかと述べている。「なぜなら情動的な次元といい、状況との相関性といい、ミッシュがとりわけ重きを置く言説の喚起的特徴といい、これらは論理学よりも、むしろたいがいレトリックに根ざしているからである」<sup>(10)</sup>。ミッシュが「レトリック」ではなく、「論理学」にこだわったのは、リッケルトやフッサールが生る哲学を「非合理主義」として非難したことに対して、その厳密な「論理性」をことさら強調しようとしたからではないかと、グロンディンは推測している。

ミッシュ自身は、グロンディンが指摘しているように<sup>(11)</sup>、解釈学的論理学の中でレトリックについて言及することはほとんどない。ミッシュは解釈学的論理学をレトリックの伝統と結びつけることはせず、レトリックは華美的な表現で思考に「危険な装い」をさせるものであるとさえ述べている。このようにミッシュは、伝統的なレトリックを「軽蔑的な意味で」捉えており、この点で解釈学に対するレトリックの一定の意義を認めているデイルタイやガーダマーとは、見解を異にしている。しかしながら、ミッシュ自身がいかに解釈学的論理学をレトリックから区別しようとしても、解釈学的論理学はレトリックとの関係を避けて通ることはできないだろう。なぜならグロンディンの指摘する通り、レトリックは特に喚起的表現の分析について役立つように思われるし、さらにまた、ガーダマーの言うように、レトリックがアリストテレスのプロネーシスとともに実践哲学の下に置かれるとしたら、解釈学的論理学が扱う「論証的なもの」もまた、教育学などの実践的な精神諸科学の方法と基礎づけに寄与する可能性を持つように思われるからである。解釈学的論理学とレトリックとの関係を明らかにするためには、まず、解釈学と論理学とレトリックとの関係を、それぞれ詳細に考察する必要がある。

## II. 解釈学と論理学 — イェーガーの「解釈の論理学」に対するガーダマーの批判

解釈学とレトリックが密接な関係にあることは、デイルタイが行った解釈学の歴史研究<sup>(12)</sup>においても明らかであるが、解釈学と論理学との関係については、ガーダマーが興味深い考察を行っている<sup>(13)</sup>。その際ガーダマーが注目するのは、イェーガーが1974年に著した『解釈学初期の歴史研究』である。この中でイェーガーは、デイルタイとは全く異なる視点から、解釈学の歴史を研究している。デイルタイが解釈学の確立を、宗教改革以降の聖書解釈をめぐる神学上の論争に求めたのに対して、イェーガーは解釈学の歴史から神学的な側面をできるだけ排除しようとする。その代わりに彼が注目するのは、「解釈学 (Hermeneutik)」という語を術語として初めて用いた、17世紀初頭の神学者ダンハウアーである。イェーガーによれば、ダンハウアーの解釈学は「解釈の論理学」を意図しており、それは「17世紀の学理論的な構想としての解釈学」とされる<sup>(14)</sup>。

ダンハウアーは「解釈の論理学」の基礎を、アリストテレスの論理学的著作である『オルガノン』に求めている。『オルガノン』の中の『命題論』では、言説をその部分から構成していく「統合の処置」が述べられているが、ダンハウアーはこのような「言明の統合的な論理学」に、新た

に「解釈の論理学」を加えて、結論を導く方法論としての「新しい分析論」を構想するのである。ダンハウアーにとって解釈学の理想は、「論理的ではない言説を、論理的な言説へと変えること、いわば溶かしこむこと」<sup>(15)</sup>である。ダンハウアーのこのような試みは、アリストテレスの論理学を、「言説および文書の解釈」へと拡大するものであり、ガーダマーはこれを「解釈学の論理学への組み入れ」であるとしている<sup>(16)</sup>。

このようなダンハウアーの見解と、それに基づくイエーガーの「解釈の論理学」の構想に対して、ガーダマーは疑問を呈している。ガーダマーにとって解釈で重要なのは、解釈の技術や論理だけではなく、「理解できないものを理解させること」であり、それは当事者間での意思疎通を包括的に援助することである。このような活動は一般に、学問的な連関の中でよりも、実際生活の交流の中でより多く必要とされる。そしてこの場合問題となるのは、意思疎通を促進するための実践的な技術だけであり、この技術の諸規則の論理的分析は、決して問題にならないのである。それゆえガーダマーは、解釈は論理学や学理論の領域に属するものではなく、むしろレトリックの領域に属するものであるとしている<sup>(17)</sup>。

解釈学の歴史の中で、特にメランヒトンとフラキウスによって、レトリックの要素が後の解釈学へと取り入れられていったという点では、ガーダマーもデイルタイも同じ見方をしている<sup>(18)</sup>。ガーダマーは、レトリックと解釈学との関係について、次のように述べている。「今や次の点においてレトリックと解釈学は窮極的に同じである。すなわち話す能力も、理解する能力も人間の自然的能力であり、もし自然の才能と正しい養育とがそろって実行されれば、技術的規則を意識的に適用することなしに、十分に育成することができる能力である」<sup>(19)</sup>。レトリックも解釈学も、確かに話すことや理解することについての技術的規則を提供するものであり、その意味ではアリストテレスにまで遡る「技術論 (Kunstlehre)」と見なされるかもしれない。しかしこのような規則は、人間本来の言語能力と言語生活に密接に結びつき、そこから自然に習得され、展開されてくるものであるから、そこから切り離して、形式的で「純粋な」技術論や学理論として、限定的に扱うことはできないのである。「技術 (Techne) ないしは技術論の『純粋な』事例に対して、レトリックは解釈学と同様に、明らかに特殊な事例を現している。両者は言語的なもの (Sprachliches) の普遍性 (Universalität) にかかわるのであって、ある一定の限られた分野でつくられる事物とはかかわりをもたない。このことに関連して言えるのが、両者とも多かれ少なかれ、自然的で一般に人間的な発話能力や理解能力から、発話や理解の技術的規則の意識的な使用へと移っていく流れの中で進展していくということである。このことはしかし、現代の科学概念からも、同様に古典古代の技術概念からも見ることはできない、別の重要な側面を持つ。日常の実践の自然的で社会的諸条件から、『純粋な技術』を切り離すことは、レトリックも解釈学も、ただ限られた範囲でのみ可能であるということである。このことはレトリックの場合、次のことを意味する。自然的素質や自然的訓練から離れた、単なる規則的知識やその習得は、実際的な雄弁さへの助けにはならない。そしてまた逆に、言説が単に技術的に完成しているだけで、それにふさわしい内容を伴っていないければ、それは空虚な詭弁法に留まるのである」<sup>(20)</sup>。ガーダマーにとって解釈学とレトリックは、両者とも人間が本来的に持つ能力に根ざし、その技術的規則は、限られた範囲でのみ通用する。したがって、イエーガーが意図していたように、解釈学を論理学へと組み込むことは不可能なのである。

### Ⅲ. 論理学とレトリック — クラウベルクによる論理学とレトリックとの接近

ダンハウアーが17世紀に試みた「解釈学の論理学への組み入れ」は、解釈学と論理学、解釈学とレトリックとの関係だけではなく、論理学とレトリックとの関係をも捉え直す契機を与えることになった。このことは、ペトルスの最近の研究に詳しい<sup>(21)</sup>。ペトルスが注目するのは、17世紀にダンハウアーに影響されて「規則に導かれた解釈」の問題に取り組んだクラウベルクである。クラウベルクはダンハウアーと同じく、「解釈の規則」を論理学として考察したが、その際クラウベルクは、論理学を「発生的 (genetisch) 部分」と「分析的 (analytisch) 部分」の2つに分けて考えている。発生的部分は、自身の思考の形成と、それを言葉で言い表すことにかかわるのであり、分析的部分は「異なる思考の適切な解明」、すなわち意味の「探索 (Ermittlung)」と、探索された意味の「批判的判断 (Beurteilung)」にかかわるものとされる。両者は思考の発生と、思考の意味の解明という関係にあり、ともに共通の規則に従っている。「発生的論理学と分析的論理学との連関で決定的な点は、次の点である。ある規則に従った発生の条件下で、読者は著者が伝えたかったことを探索でき、また著者が読者に教えようと意図していたものを学ぶことができる。この条件が満たされれば、実際に発生的論理学だけではなく、分析的論理学もまた、実質的認識 (materiale Erkenntnis) の獲得へと至る」<sup>(22)</sup>。このことから明らかなように、クラウベルクの論理学で目指されているのは、「実質的認識の獲得」であり、それは「思考とそれによって表出された事態との一致」を目指す認識を「発見 (Auffindung)」し、「判断」することである。このような論理学をペトルスは「新しい論理学」と呼び、推論や判断の形式のみを取り扱うスコラ哲学的な「古い論理学」から区別している。しかしペトルスによれば、クラウベルクは新しい論理学によって古い論理学を排除しようとしたわけではなく、自身や他者の思考の「叙述形式」の「道具」として、古い論理学の必要性をも認めているのであり、両者の統一を目指しているのである<sup>(23)</sup>。

ところで、クラウベルクは新しい論理学の中で、論証の際のテーマの設定や記述の様式や聴衆について取り扱っているが、これらの要素はもともとアリストテレスのレトリック論に起源を持つものである<sup>(24)</sup>。ここに見られるのは、論理学の領域の拡大とレトリックへの接近である。新しい論理学で問題となるのは、認識の発見や叙述の形式、伝えられた意味の判断などであり、これらはすべて一定の規則に従うが、本来レトリックの領域でこのような規則に対応するものは、「トピック (Topik)」ないしは「トポス (topos)」である。ペトルスによれば、元来、トポスはアリストテレスに由来するものとされるが、16世紀から18世紀初頭にかけてトポスは、人文主義者の間で「弁証術 (Dialektik)」ないしは論理学と密接に結びつけられるようになったとされる。人文主義者たちの範となったキケロは、トポスは「論拠の発見の方法」であり、「探求の形式 (Suchfolmel)」として役立つものとした。しかしすでに論拠の発見の段階で、その配列から言語的表現までが、一連の「全体的な生産過程」として、語り手や著者の頭の中ですでに考慮されているはずである。このような見方に立って人文主義者の間で、トポス論は「発見 (inventio, Auffindung) の方法」だけでなく、論拠の「配置 (dispositio, Anordnung)」、さらには言語による論拠の「修辭 (elocutio, Ausschmückung)」にまで、その範囲が拡大したとされる<sup>(25)</sup>。

トポス論のこのような拡大は、ペトルスの指摘によれば、当時の人文主義者の間で、論理学とレトリックを区別することを困難にした。トポスが論拠の発見と配置と修辭にまでかかわるものとしたら、論理学とレトリックはこれら三者のどこまでを分担するのであろうか。この問いに対するひとつの答えとして、ペトルスは18世紀初頭のヴァイゼの見解を挙げる。「まず第一にヴァイゼは、テキストの生成の経過を確かに既知の用法 (発見、配置、修辭) で区分する。しかし彼

はこの区分が、論理学とレトリックが課題とする領域と同じであるとは見ない。むしろ彼が強調するのは、これらの区分の異なる優先性 (Präferenz) であり、この優先性が、テキストの生成という観点から、論理学とレトリックを要求するのである。論理学がとりわけ論拠の発見と配置に従事する一方で、レトリックはまず、論拠の言語による形態化 (Gestaltung) にかかわる。論理学とレトリックが排除しあうものではなく、論拠の配置と言語による形態化に、優先的にかかわりあうというこの見解は、これら二つの領域は互いに補完しあうものであるという第二の考えに基づいている<sup>(26)</sup>。このようにヴァイゼによれば、論理学とレトリックは「相補性 (komplementarismus)」という相互関係にある。もちろん、両者が論拠の発見と配置と修辞に互いにどのようにかかわり合い、補完しあうのかはさらに詳細な考察を必要とするだろう。しかしここで重要なことは、ペトルスが指摘しているように、当時の人文主義者の間では、論理学とレトリックとの関係は相補的に捉えられ、両者は他者の思考を理解するための「良いコミュニケーション」に役立つものとして捉えられていたという事実である<sup>(27)</sup>。

#### IV. ペレルマンの「新しいレトリック」

##### —アリストテレスのレトリック論の復権と発展

ペトルスの研究は、すでに人文主義の時代に論理学の領域の拡大が試みられ、それに伴って論理学がレトリックへと接近した結果、両者の境界が次第に曖昧になったことを明らかにした。ペトルスのこのような指摘は、19世紀以降発達した、推論形式の範を数学に求める現代論理学の立場からすれば、誤った見解のように思われるかもしれない。なぜなら現代論理学では、論理学はあくまで数学的な明証性を目指すものであり、それに対してレトリックは効果的な説得を目指し、学問の方法としては不適切なものであると見なされるからである。しかし、このようなレトリックに対する批判がある一方で、人文主義以降、認識論的な観点からレトリックと論理学との接近が始まり、18世紀初めには、レトリックを実践的な学問の方法へと適用しようとしたヴィーコが登場してくることもまた、歴史的事実である。さらに、現代論理学に対する反省から、レトリックを科学的認識や方法論へと適用しようとするペレルマンの試みは、現代論理学のこれまでのレトリック批判に対する強力な反批判となっている。

ペレルマンは、論理学の起源とされるアリストテレスの『オルガノン』の中で、アリストテレスが2種類の推論を区別していることに注目する。一つは「分析的推論」(分析論)であり、もう一つは「弁証的推論」(弁証術)である<sup>(28)</sup>。分析的推論とは、「三段論法」に代表される純粹に形式的な推論であり、複数の前提が命題として立てられた時、そこから必然的に導かれる結論を明らかにするものである。この場合推論の妥当性は命題の真偽によって決定され、そこに一般の意見が介入する余地はない。それゆえ分析的推論は、「必然的かつ無人格的論証的推論」である。それに対して弁証的推論とは、「人びとによって一般に受け入れられている意見を前提とする推論」である。この推論は、誰か相手があってその相手を説得しようとする議論であり、人格を持った相手への作用によってその妥当性が評価される推論形式である。「分析的推論と弁証的推論との間には明確な区別があるのである。前者は真偽を問題にし、後者は意見を問題にする。それぞれはその特有の言論形態を要求する」<sup>(29)</sup>。

ところでアリストテレスは、弁証的推論 (弁証術) に「弁論術」(レトリック) を対置させているが、アリストテレスの言う弁論術とは「それぞれどんな事柄に関してでも、可能な説得手段を見つける能力」を意味する。アリストテレスによれば、その研究課題は1. 説得立証法 (説得するための証拠立てで、トポスは本来この課題に属する)、2. 修辞 (表現) 法 (語らなければ

ならないことを、どのように語ったら良いのか)、3. 配列法(弁論の諸部分をどのように配列したらよいのか)の三つに分けられる。弁証術と弁論術は、アリストテレスにおいて対応関係にあるが、どちらも一般に受け入れられている意見を前提にして、相手の説得を目指すという点では共通している<sup>(30)</sup>。両者は中世以降、いわゆる「七自由学科」の科目(「弁証術」と「修辞学」)へと継承されて行く。しかしこの継承の過程で、弁証術と弁論術の内容とその区分は、次第に曖昧なものとなっていく。弁証術は「あらゆるものを発想し判断する一般的技術」と見なされ、アリストテレスの弁証的推論だけではなく、分析的推論をも含み、さらにはアリストテレスが弁論術の研究課題とした論拠の発見(説得立証法)と構成(配列法)をも含むものとなる。その結果、弁論術の研究課題として、「修辞(表現)法」のみが残され、こうしてレトリック=修辞学=言語の装飾形式(文彩)の詳細な研究、という「古典的なレトリック」像ができあがることになる。このような狭い意味でのレトリック像(=修辞学)が、後のレトリックの衰退を招くことになったのだと、ペレルマンは主張する。

アリストテレスが論理学の内容として、分析的推論(分析論)と弁証的推論(弁証術)を考えていたこと、さらに弁証的推論は弁論術(レトリック)と対応関係にあったということ、これらのペレルマンの指摘は重要であろう。現代論理学では、論理学の内容はアリストテレスの分析的推論が扱う形式論理にのみ限定され、弁証的推論は完全に除外されている。ペレルマンは、このように現代論理学が弁証的推論を除外して考えることは、中世の論理学が、分析的推論と弁証的推論の区別を曖昧にしたことと同様の過ちを犯しているとしている。現代論理学が扱う推論形式は、確かに数学的な論証を必要とする場においては重要である。しかし、われわれが日常生活において行う推論は、ある主張に対する賛成や反対、批判や反批判といった議論の場において行われることもまた、確かである。それゆえペレルマンは、論理学の新しい領域として、アリストテレスの弁証的推論を復活させ、このような推論を扱う論理学を「新しいレトリック」として特徴づけている。「論理学をあらゆる形の推論の研究として考える限り、形式論理学を扱う論証の理論に加えて、アリストテレス的な弁証的推論を扱う議論法の理論を補うのが当然であろう。アリストテレス的な弁証法的推論の内容は、ある争点に対する賛成または反対のための議論法である。新しいレトリックの対象はかような議論法とその展開の諸条件との研究である。それはアリストテレスのレトリックを受けつぎ、さらに豊かにしようとするものである」<sup>(31)</sup>。

ペレルマンのこのような考えは、論理学の側から見れば、その領域の拡大であり、レトリックの側から見れば、アリストテレスの弁証術と弁論術の復権であると言えることができる。アリストテレスは弁証術が一人の相手を対象とし、弁論術が複数の相手を対象とすると述べているが、ペレルマンの言う「新しいレトリック」は、自分自身の自己省察をも含めた「あらゆる種類の聴衆」を対象とするものである。「新しいレトリック(新しい弁証法)としての議論法の理論は、形式的妥当性を事とする推論や機械的処理の可能な論理計算に限られず、広く非論証的言論全体の研究を目ざすものであり、相手とする聴衆の性質、争われている問題の性質がいかなるものであれ、説得説伏のためのあらゆる言論領域を包含するものである」<sup>(32)</sup>。ペレルマンは、このような新しいレトリックの一般的理論を前提とした上で、それを聴衆のタイプや、法律や哲学など特殊な学問領域に応じて、さまざまに適用することの有益性を説いている。このような考えに基づけば、教師や教育に特有のレトリックも、当然考えられることになろう。

## V. 解釈学的論理学とレトリックとの関係

これまでの考察から、レトリックと解釈学と論理学との関係をまとめると、以下のようになる。

1. レトリックと解釈学は、ガーダマーが指摘するように、人間本来の話す能力と理解する能力に基づいており、これらは日常生活の中で、意思疎通を目的として常に相互的に行われている行為である。認識論的に言えば、レトリックは思考を言語によって表現することにかかわり、解釈学は言語によって表現された思考の意味の探索と判断にかかわる。ペトルスの言い方を用いれば、両者は言語を媒介とした思考の「発生と分析」にかかわるのであり、「可逆的關係 (Umkehr-Verhältnis)」<sup>(33)</sup>にある。

2. レトリックは説得のための技術的規則を提供し、解釈学は意味理解のための技術的規則を提供する。しかしこれらの規則は、日常の言語活動に根ざし、その内容と結びついて初めてその妥当性が検証されるので、内容と切り離された純粋な意味での説得と解釈の規則は、限られた範囲でしか通用しない。このことは、レトリックと解釈学を論理学の中へと組み込み、あるいはそれへと還元することは困難であることを意味する。

3. 一般に現代論理学の立場では、論理学は命題に基づいた数学的な明証性を目指し、レトリックはトポスに基づいた効果的な説得を目指すものとされ、両者は対立関係にある。このように論理学とレトリックを対立的に捉える立場がある一方で、両者の密接な関係を主張する立場もある。この立場によれば、本来論理学は、アリストテレスの『オルガノン』にその起源を持ち、この著作中には形式論理的な分析論と、弁証術および弁論術にかかわるトポス論が含まれている。アリストテレスが行った分析論と弁証術と弁論術の区分は、人文主義の時代には、トポス論の拡大と共に曖昧となり、これらの区分は、論理学とレトリック双方にかかわる内容上の区分として捉えられるようになった。この立場は、論理学とレトリックを相補的な関係として捉えることにより、論理学の内容の拡大をもたらした反面 (ペトルスの「新しい論理学」)、レトリックの内容を修辞法に限定する結果になった。これに対して、ペレルマンはアリストテレスの弁論術の復権を目指して、「新しいレトリック」を構想している。ペトルスもペレルマンも内容的には、アリストテレスの分析論と弁証術と弁論術を、それぞれ切り離して考えることはせず、密接な関係にあるものとして捉えている。

以上のことを踏まえて、解釈学的論理学とレトリックとの関係について考察してみよう。ミッシュの解釈学的論理学をレトリックと見なす見解は、ミッシュの「論証的なもの」の概念、特に「喚起的表現」にその根拠を置いていた。喚起的表現は、レトリックで言えば隠喩に相当するものと考えられ、この限りで解釈学的論理学はレトリックと接点を持つと言える。しかしミッシュが行った解釈学的論理学についての講義全体を通して見れば分かることだが、ミッシュが追求しているのは、レトリックの技法ではなく、人間の認識において、「論証的なもの」が発生してくる過程の分析である。ミッシュがこの分析のための出発点とするのは、認識の対象となる世界が、生が何らかの形で「表現 (Ausdruck)」されたものであるという前提である。「表現とは至る所で、そこにおいて生が身体的に把握され、ある共同体の人間に結びついているような形式である。認識が一般に、生によって表現されたものへと、体験可能で理解 (Verstehen) できる内実へと理解していくように方向づけられているとしたら、表現はどこでも、われわれにとって最初のものである。一見すると最短の道は、直接に心的生の中へと深化していくことのように見えるかもしれないが、心的生にとってもまた、表現を経由する間接的な道が重要なのである」<sup>(34)</sup>。デイルタイが精神科学の方法として「理解」を際立たせ、その根底にある「体験」を重視したのに対し、ミッシュは理解の根底に「表現」を置いていることが分かる。ミッシュにとって重要なのは、デイルタイとは違って理解と体験との関係ではなく、理解と表現との関係、より詳しく言えば、表現から理解へと至る過程あるいは逆に理解から表現へと至る過程なのである。「われわれが活動しているのは、ある表現世界であって、体験世界ではない」<sup>(35)</sup>。



ミッシュによれば表現とは、語や芸術、宗教などそれがどのような形式を持つものであれ、ある共同体の人間と結びついており、理解を可能にさせるものである。この限りで表現は「普遍的 (universal)」であるとされ、ミッシュの関心は、このような普遍的表現が、生からどのようにして形態化されてくるのかということに向かうのである。ディルタイはこの普遍性の根底に、「心的なもの」として前提される「心的生の構造」を置いたが、ミッシュは「心的なもの」それ自体を、表現を経由して理解される対象として捉える点で、ディルタイとは明らかに異なっている。そしてミッシュは、心的生が対象として把握される以前の生の段階にまで遡ろうとするのである。このような段階を、ミッシュは「生の態度 (Lebensverhalten)」<sup>(36)</sup>と名づけている。それは心的なもの「身体的振る舞い (Leibeshaltung)」が一体となった「素朴な (naiv)」態度であり、その態度が表す内容について、ある環境や状況から理解されるようなものである。例えば、恐れや怒りなどは、人間を始めとする生物のある「態度の表れ」であり、それが現す内容は、その身体的振る舞いと環境を通して理解される。ミッシュによれば、このような理解は「心理学的反省」以前の段階とされ、そこでは心的なもの「身体的なもの」、より一般的に言えば「内的なもの」と「外的なもの」は区分されることなく一体となって把握される。このような理解をミッシュは、「基本的理解 (elementares Verstehen)」<sup>(37)</sup>と呼んでいる。

それではこのような基本的理解から、いかにして心的なものが対象化されてくるのだろうか。ミッシュによればそれは、自然的で素朴な生の態度から「自己省察 (Selbstbesinnung)」へと向かうこと、すなわち「自己自身を見いだすこと (Sich-selbst-Finden)」によってである。そしてこのような態度の転回は、自己と対象とを区別することを契機とするのであり、それは言語によって表現された対象の意味理解を通して可能となる。それゆえ心的なものの理解とは、実は言語によって分節化された生の意味理解にすぎず、心的なもの「身体的なもの」、あるいは内的なもの「外的なもの」という区別は、このような分節化された生に対する「イメージ的な言い方 (bildliche Wendung)」にすぎない。このことをミッシュは、プレスナーの言葉を引用して次のように述べている。「なぜなら正確に見れば、心的なものは理解の行為の中で、一般に行き着くものではない。それどころか決して、意図されないものである。ある人がその頭の中でどのような考えや、表象や感情や願望を持っているのかは、観察者には隠されたままであり、ある先鋭化された状況において他者が必ずしも直接に白状することがない場合、せいぜい全体の状況から偶然を通して観察者に分かるだけである。しかしそのことは理解にとって、まったく問題ではない。それがあたかも問題であるかのように見せかけているものは、ただ言語的關係 (sprachliche Beziehung) から生じているにすぎない。この言語的關係は、理解の対象と通常の生における心的なものに対して区分されない。なぜなら区分される必要がないからである」<sup>(38)</sup>。こうして、素朴で自然的な生の態度から、言語による意味理解を通して、生が対象化され、論証的に把握されていく過程を解明していくことが、ミッシュの解釈学的論理学の中心となる内容となっている。

このように見てくると、解釈学的論理学はレトリックと同一視されるものではなく、むしろレトリックの持つ普遍性を、生の哲学の立場から根拠づけるものであることが分かる。レトリックは万人に対する説得論証の技術であるが、このような技術が、なぜ普遍的な規則として通用するのかは、レトリックの領域で問題にされることは決してない。解釈学的論理学の観点から言えば、レトリックの持つ普遍性とは表現の普遍性なのであり、それは根源的な生の態度から、言語によって生が客観的に分節化し、形態化されてきた結果なのである。このことは逆に考えれば、レトリックが明らかにしたさまざまな技法や規則は、このような生の分節化の規則であるとも言える。このような技法や規則を、ミッシュが取り扱った「論証的なもの」を産み出す規則として考察することも可能であろう。しかしミッシュの解釈学的論理学の中心は、個々の規則の分類やそ

の体系化にあるのではなく、あくまで論証的なものが発生してくる過程の分析にある点で、レトリックとは本来的に区別されるべきである。

レトリックが解釈学的論理学に対して果たす機能があるとすれば、レトリックが明らかにした技法や規則を通して、表現の普遍性を再認識させる点である。レトリックの目的は意思疎通を達成することにあると言えるが、そのために用いられる技法や規則は、意思疎通に至るための確実な論拠と効果的な表現法を提示する。このことは解釈学的観点から言えば、レトリックはデイルタイの言う理解の「共通性 (Gemeinsamkeit)」を自覚させ、それを拡大することに貢献するということである。レトリックが理解の共通性のための論拠や規則を提供し、体系化すればするほど、解釈学的論理学にとって、普遍的な表現世界から、根源的な生の態度にまで遡る生の分節化の過程を分析する手がかりが得られるものと考えられる。このことは、人間の認識過程の分析とその基礎づけにつながるものであろう。

## VI. 精神科学の基礎づけに対するレトリック研究の意義

ミッシュはこの生の分節化の過程を、生が論証的なものとして形態化されてくる過程として捉え、この過程が純粋に論証的な確定と喚起的表現という両極の間で展開されることを明らかにした。形式論理学の観点から見れば、論証的な確定は上位の類概念と下位の属概念によって定義されるものに限定されるが、解釈学的論理学の観点から見れば、このような定義は、論証的なものの一方の極に位置づけられるにすぎない。「そのような定義が位置している場所は、精密科学においてその法則的な諸関係に即して認識されるような、純粋に理論的な対象性が属している極である。他方の極には、生が客観化されたものの中で示される解釈学的形態化 (hermeneutische Gestaltung) があり、この形態化が起こる間、その中心、つまり形而上学的中心において、思考可能性 (Gedankenmäßigkeit) と窮めがたさ (Unergründlichkeit) が、まさに内密に結びついて現れるのである」<sup>(39)</sup>。生は喚起的表現を通して解釈学的に形態化され、この形態化の過程において、生の「思考可能性と窮めがたさ」が結びつく。この時生は、「解釈学的概念 (hermeneutischer Begriff)」として概念的に対象化される反面、そこには常に「言明によって完全に止揚することはできないという意識」が伴うものとされる<sup>(40)</sup>。このような意識を、われわれは生の実存的契機と呼んでも差し支えないだろう。

解釈学的概念において、生の思考可能性と窮めがたさが結びついた時、生は「実在性 (Realität)」を持って対象化される。このようにして得られた実在性を、ミッシュは「生の真理 (Lebenswahrheit)」と呼ぶ。「そこでは真理と表現の真正さとは、一体である。この場合の真理は、純粋に論証的な形式化の場合とは違って、判断とその事柄的な正当性に制限されるものではなく、生の真理である」<sup>(41)</sup>。ここでミッシュは、論理学における論証的なものの概念だけではなく、真理概念をも問い直しているのである。この概念は、これまでの考察を踏まえて、形式的に次のように区別することができるだろう。

1. 純粋に論証的な形式に基づく明証性 (数学の命題など)。
2. レトリックが明らかにする、理解の共通性を形成する規則性 (トポスや隠喩など)。
3. 解釈学的概念における生の真理。

これらはいずれも、解釈学的論理学で言う「論証的なもの」を構成するが、その構成はミッシュが明らかにしたように、1. 純粋に論証的な明証性と3. 生の真理を両極として、この中間領域に2. レトリック的規則が位置づけられるものと考えられる。しかしこれら3つの領域は、厳密に区別されるものではなく、ミッシュの言うように、片方の極から他方の極へと段階的な移行が

見られるものと捉えるべきだろう。この意味では、レトリック的規則は、生の真理と純粹に論証的な明証性を媒介するものであると言える<sup>(42)</sup>。

人文主義の時代における「新しい論理学」や、ペレルマンが提唱している「新しいレトリック」が対象としている領域は、ミッシュの解釈学的論理学で言えば、論証的なものの中間領域であるレトリック的規則に相当するものである。新しい論理学やレトリックが、説得論証のための技法や規則を体系化していくことを目指し、そこでは純粹に論証的な明証性との関係が常に問題となっているのに対して、解釈学的論理学では、レトリック的規則と生の真理との関係が問題となる。すなわちレトリックは、喚起的な表現を用いて、生の窮めがたさへと至る道を開くものであることを、ミッシュの解釈学的論理学は教えているのである。

以上のことは、最近のレトリック研究が、精神科学の基礎づけに対して与える可能性について、次のことを示唆するように思われる。

1. レトリックが、人間が生を対象化して、論証的に把握するための技術的規則であるとすれば、その規則はそのまま、客観化された生の理解を目的とする精神科学の方法にも適用できるといふことである。レトリックが明らかにした説得論証のための技法や規則は、精神科学における理解の共通性を形成するのに役立つ。精神科学の言説をレトリックの観点から分析することにより、その客観性の根拠となっている論拠や、その領域に特有の思考の基本的法則を見いだすことも可能であろう。

2. しかしこの方法は、限界があることも自覚しておかなければならない。解釈学的論理学は、レトリックの規則が論証的なものとして、根源的な生の態度から生じてくるものであることを明らかにした。すなわちレトリックは、身体的行為の実践を通して抽象化されてくる、生の分節化の規則である。生はこのように思考可能性を持つ反面、常に窮めがたさをも併せ持つ。このような二重の特徴の中で、生は「展開 (Explication) と創造 (Schaffen)」を繰り返しながら発展するのであり、この過程で論証的な規則として捉えられるものは、生のごく限られた範囲にすぎないのである。このことは、レトリックの規則の普遍性は決して普遍妥当的なものではなく、それが生じてきた実践的な言語生活の中で、その妥当性が常に検証されていく必要があることを意味している。このような見解は、解釈学とレトリックに対する論理学の関係についてガーダマーが述べた見解を、生の哲学の立場から裏づけるものであると言える。

3. それでは、レトリック研究は精神科学の基礎づけのために、どのような方向に進むべきなのであろうか。レトリックが明らかにする論拠や思考規則は、ミッシュが解明した論証的なもののうち、純粹に形式的に確定できる極に方向づけられているが、他方われわれは、喚起的な表現によってしか把握できない領域が存在することも忘れてはならない。レトリックは、本来このような領域を発見するための「発見の術」であったのである<sup>(43)</sup>。この発見こそが、ミッシュの言う生の真理の発見なのであり、精神科学の基礎づけが最終的に向かうべき方向であると言える。精神科学において、生の真理が獲得されることは、そこにおいて生の思考可能性と窮めがたさが結びつくことであり、それは解釈学的概念の形成を通して可能となる。ミッシュがそのための方法として挙げるものが、アリストテレスの弁証術や弁論術ではなく、無知の自覚へと導くソクラテスやプラトンの弁証術であることは<sup>(44)</sup>、レトリック研究が、最終的に生の窮めがたさへと至るべきものであることを示唆している。われわれはここに、精神科学の認識論的方法論的基礎づけと、基礎存在論的基礎づけとの対立を克服する契機を見いだすことができるのである。

注

- (1) F. ローディ、大野篤一郎訳「デイルタイ、ガーダマーと『伝統的』解釈学」(岩波書店『思想』、1984年2月、716号所収)、26頁。なおこの論文は、補筆改訂されて次の論文集に再録されている。F.Rodi, *Erkenntnis des Erkannten*, Frankfurt a.M. 1990, S.89-101.
- (2) 同、27頁。Rodi, a.a.O., S.91
- (3) Misch, *Lebensphilosophie und Phänomenologie*, Leipzig/Berlin 1931, S.85.
- (4) Misch, *Der Aufbau der Logik auf dem Boden der Philosophie des Lebens*, Freiburg / München 1994, S.570.
- (5) 例えばドイツのデイルタイ研究の専門誌である『デイルタイ年報』では、第11巻と12巻の2巻に渡って、ミッシュの特集を行っている。Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenschaften, Göttingen, Bd.11/1997-98., Bd.12/1999-2000.
- (6) 例えばケーニヒについては、『デイルタイ年報』第7巻 (Dilthey-Jahrbuch, Bd 7/1990-91) で、すでにケーニヒとプレスナーの特集が組まれており、2人の往復書簡集も1994年に出版されている。Vgl., H.-U. Lessing/A. Mutzenbecher (Hrsg.), *Josef König/Helmuth Plessner Briefwechsel 1923-1933*, Freiburg/München 1994. またリップスについての最近の研究書として、以下のものがある。G. Rogler, *Die hermeneutische Logik von Hans Lipps und die Begründbarkeit wissenschaftlicher Erkenntnis*, Würzburg 1998; A.W.E. Hübner, *Existenz und Sprache*, Berlin 2001.
- (7) Misch, *Der Aufbau der Logik auf dem Boden der Philosophie des Lebens*, S.571.
- (8) H.-G. Gadamer, *Die Logik des verbum interius*, H.-G. Gadamer im Gespräch mit G.K.-Bertram und F.Rodi, in : *Dilthey-Jahrbuch*, Bd. 11/1997, S.29.
- (9) Gadamer, a.a.O., S.29.
- (10) J. Grondin, *Georg Misch und die Universalität der Hermeneutik: Logik oder Rhetorik?*, in : *Dilthey-Jahrbuch*, Bd11/1997-98, S.61.
- (11) Grondin, a.a.O., S.62.
- (12) W. Dilthey, *Die Entstehung der Hermeneutik (1900)*, in : *Gesammelte Schriften*, Bd.V, S.317-338.
- (13) Gadamer, *Rhetorik und Hermeneutik (1976)*, in : *Gadamer, Gesammelte Werke*11., S.276-291; Gadamer, *Logik oder Rhetorik? (1976)*, in : *Gesammelte Werke*11., S. 292-300.
- (14) Gadamer, *Logik oder Rhetorik?* , S.292.
- (15) Gadamer, *Rhetorik und Hermeneutik*, S.288.
- (16) Gadamer, a.a.O., S.294.
- (17) Gadamer, a.a.O., S.294f..
- (18) Gadamer, a.a.O., S.280-283; Dilthey, *Die Entstehung der Hermeneutik*, S.325.
- (19) Gadamer, a.a.O., S.280.
- (20) Gadamer, a.a.O., S.289.
- (21) K.Petrus, *Genese und Analyse. Logik, Rhetorik und Hermeneutik im 17. und 18. Jahrhundert*, Berlin/New York 1997.
- (22) Petrus, a.a.O., S.12
- (23) Petrus, a.a.O., S.18.
- (24) アリストテレスのトポス論については、次の論文を参考にした。岡本英明「トポス論と解釈学—アリストテレスを中心にして—(九州大学教育学部紀要(教育学部門)、1984、第30集、1-8頁)、同「レトリックとしての解釈学—教育を論じる視点について—」(九州大学教育学部紀要(教育学部門)、1986年、第32集、1-11頁)。

- (25) Peturs, a.a.O., S.27.
- (26) Peturs, a.a.O., S.28.
- (27) Peturs, a.a.O., S.29.
- (28) ベレルマン、三輪正訳『説得の論理学 ―新しいレトリック―』、理想社、1993年、21頁。ベレルマンは分析的推論は『オルガノン』の中の特に『分析論前書』『分析論後書』の中で、弁証的推論は『トピカ』『ソフィスト的論駁について』に加えて、さらに別に『弁論術』の中で展開されているとしている。
- (29) ベレルマン、前掲書、23頁。
- (30) 弁証術と弁論術の対応関係は、次の研究に詳しい。浅野植英『論証のレトリック』、講談社現代新書、1996年、162-166頁。
- (31) ベレルマン、前掲書、26頁。
- (32) ベレルマン、前掲書、27頁。
- (33) Peturs, a.a.O., S.13.
- (34) Misch, a.a.O., S.78.
- (35) Misch, a.a.O., S.78.
- (36) Misch, a.a.O., S.148. ミッシュの「生の態度」と解釈学的論理学との関係については、次の論文を参照。H.-U. Lessing, *Lebensverhalten, Ausdruck und Leiblichkeit*, in : *Dilthey-Jahrbuch*, Bd. 12/1998-2000, S.73-89.
- (37) Misch, a.a.O., S.149.
- (38) Misch, a.a.O., S.150.
- (39) Misch, a.a.O., S.576f.
- (40) Misch, a.a.O., S.572f.
- (41) Misch, a.a.O., S.574.
- (42) ガブリエルは、このような真理概念を、正確に命題で定義できる真理と、芸術や文学作品などにおいて、状況が「生き生きとして意義深く」現前化してくるような認識とに分けて、区別している。G. Gabriel, *Logik und Leben*, in : *Dilthey-Jahrbuch*, Bd. 11/1997-98, S.45.
- (43) 最近のレトリック研究の世界的動向について、野内良三は「修辞学（文彩）の見直し」を挙げ、文彩を「装飾的な技法」として捉えるのではなく、「人間の認識活動に根ざす本質的な思考パターン」として捉える動向に注目している。「ある時期から、レトリックは当初の発見的＝創造的性格を失い、ステレオタイプ化した文彩の収集と分類に墮したように見える。本来、文彩とは日常的な平凡な表現を突き破る斬新な表現の追求であったはずであり、その作業の追求の結果として、ある特徴的なパターンが確認されて文彩の一覧表が作成されたはずなのだ。第一の見直しは、狭義のレトリック [筆者注；修辞学のこと] が本来もっていたはずの創造性の活性化だと言えるかもしれない」（野内良三『レトリック入門―修辞と論証』、世界思想社、2002年、25頁）。このことは、レトリック研究が、技法や規則の体系化よりも、その創造性の秘密へと回帰する必要があることを示している。ミッシュの言葉で言えば、生の真理の発見の方向へと向かう必要があることを示しているのである。
- (44) Misch, a.a.O., S.574ff.

## **Zusammenfassung**

### **Hermeneutische Logik und Rhetorik**

— Über die Möglichkeit der Rhetorik für die Grundlegung der Geisteswissenschaften —

Diese Abhandlung untersucht die Beziehung zwischen der hermeneutischen Logik von Georg Misch und der Rhetorik. Bisher hat man darüber gestirrt, ob die hermeneutische Logik am evozierenden Ausdruck und die Rhetorik identisch seien. Der Unterschied zwischen den beiden liegt aber darin, ob der evozierende Ausdruck genetisch oder systematisch analysiert wird. Während die Rhetorik die Systematisierung der Regeln der Überredung und der Argumentation intendiert, versucht die hermeneutische Logik den Prozess der Gestaltung der Diskursivität genetisch zu analysieren. Die Rhetorik gibt der hermeneutischen Logik den Schlüssel zur Lösung der Regel, die den Lebenszusammenhang objektiv artikuliert. Dagegen zeigt die hermeneutische Logik der Rhetorik die Unergründlichkeit des Lebens, die zur Lebenswahrheit führt. Wenn die Rhetorik sich an der Entdeckung der Lebenswahrheit orientiert, so dient sie zur Grundlegung der Geisteswissenschaften.